

## Post-modernism, popular culture and music

—Beginning postmodernism—

### 1. はじめに

ある日、突然「音」がそこにあった。そんなことはあり得ない。誰かが始めに「音」として意識的にそれを捉えたわけで、そうでなかったら世界最古の芸術だといわれる「音楽」は、この世に存在しなかっただろう。時代と共に、演奏機械の発達と共に、音楽はそうして様々な変化を遂げ、着々とその芸術としての台座を築き上げてきた。

そして時は1960'。Post-modernityの幕開け。大量消費社会。大衆文化。ジェンダー…。モダンな音楽もひとつのノスタルジーになる。POPな音楽も耳に心地よければOK。あらゆるジャンル、スタイル、がミックスして、新しい音楽を生み出していく。その価値を見出すのは…。

音楽で溢れかえったこの世の中。悪くないし、楽しい。けれども、それを考えるのはそんなに甘くない。”POP”と同時に”Heavy”な post-modernism, popular culture and music をどうぞごゆっくりご堪能下さい。

### 2. Post-modernity -Debates in popular culture-

“Pop”の最も広い感覚

→Post-modernismが最初の形作られた上での概念のコンテクスト

大衆文化に敵意を向ける modernism に立ち向かう重要な傾向

・Pop culture…若者文化やマイノリティー文化などのサブカルチャーの表現体へ

#### Post-modern 現象

Deliberately ambiguous and heterogeneous situations…わざと曖昧な異質の状況

①資本主義社会（大量生産・大量消費主義社会）

大衆と資本主義の台頭は、芸術の商品化とも密接につながっていく（P166）

→我々の生活はPopular Cultureに囲まれるようになってくる

②大衆文化の台頭

イデオロギー構造は人々の生活と関わる（P166）

→人々の日常生活の中のもの（Pop Culture）に注目をしていく

Post-modern Pop Cultureは、“a new sensibility”（新しい感覚）となる

### ③フェミニズムという考え方

Cultural study の政治的な関心…フェミニズムのアイデンティティの構造と母体 (P169)

→Postmodernism と Popular Culture は「政治的な領域」と「表象の苦闘」として再定義、再評価している

## 3. Life of Music –古典から現代へ–

### a. modern music

–音楽家の芸術家としての自立–

19世紀、音楽家たちは技術者としてではなく、自立した芸術家としての地位を勝ち取る

20世紀音楽—複製技術時代の芸術—

「芸術作品の複製技術は、芸術に対する大衆の関係を変化させる」ベンヤミン

–時間的制約の消滅と空間的制約の消滅–

「音はひとつの時間に一つの場所でしか生起しなかった」→音の複製技術の発明は、音のあり方に関するこのような時間的空間的な制約を無くしていった。

–ポピュラーミュージックの誕生と発展–

1920年代にラジオ・レコードを通して大量生産される商品としてポピュラー音楽は誕生した。

### b. Pop music, pop rock n roll in postmodernism

#### ポップ・ミュージック

支配的な文化の周縁に存在する、若者やマイノリティーのサブカルチャーのひとつだった。それが大衆文化と資本主義の台頭でビッグ・ビジネスとなり、もはや周縁の文化ではない。

ポップ・ミュージックには3つの特筆すべき時期がある

①1954年頃…ロックンロール音楽の確立

②1964～68年頃…ポップ・ミュージックが労働者階級だけのものから中流階級をも取り込んだものへ

③1975～78年頃…ポストモダン・ポップ・ミュージックの出現

#### Pop music in Postmodernism

特徴的な傾向

- ・積極的に他のジャンルの音楽からスタイルを引用
- ・過去の音楽からの盗用 …サンプリング

・ノスタルジア

⇒音楽の真正性(authenticity)や創造的であること(creativity)を重視しない。

ポストモダニズム時代の音楽がすべてポストモダニズム的な音楽というわけではない。

同時にモダニズム志向の音楽も依然と存在している。

ポストモダン・ミュージックの例…Talking Heads etc.

#### c. Experimental Music

1960年代以降、主にアメリカ東海岸で発展。西洋音楽の作曲者中心の音楽から音そのものを解放することを目指す為、社会と日常の行為に根ざすパフォーマンス的なものが多い。

モダン音楽…作曲者による作曲の技法(※)に重点が置かれている  
実験音楽…音楽的な行為の枠を問うのが特徴

(※)十二音技法(じゅうにおんぎほう)

12平均律にあるオクターブ内の12の音を均等に使用することにより、調の束縛を離れようとする技法。一般にアルノルト・シェーンベルクが1925年に創始した(とされる)。

・John Cage “4’ 33” (1952)

→偶然性と不確定の状態によって十二音技法の支配から音そのものの要素を自由にする  
(P182) ” purposeless music”

#### d. Minimal Music

音の動きを最小限に抑え、パターン化された音型を反復させる音楽。1960年代から盛んになり、単にミニマルと呼ばれることもある。微細な変化を聞き取るのが目的であり、全体的な視点から徐々に展開していく。

・Steve Reich “Eight Lines” (1983)

→オーグメンテーションのプロセスを用いることにより、従来の階級的な調和とは一線を画した音質の復活へ (P184)

…ミニマルミュージックはその後テクノミュージックやエレクトロニカのアーティスト達へも影響

### 4. Post-modernity によってもたらされたもの

#### a. 社会性 (sociality)

High-culture→ High/Low culture

・経済や文化の担い手が一部の特権階級から大衆へとシフト…文化の境界線が曖昧に

→作品の価値を「作者」や一部の知識人ではなく、「鑑賞者」が決める方向へ

“作曲者は「聴衆とのコミュニケーション」を優先事項であると考え、「聴衆が聞いているか否か」を気に留めるようになった。” (Clarke, Garry E “Music” 1985)

b. 折衷様式 (eclectic styles)

・あらゆるスタイル（「古典」「モダン」を含む）を折衷する→伝統の再解釈

→serial modernismからの脱却

c. 相対性 (relativity)

・「古典」「モダン」音楽の「新しさの追求」という理念→ポストモダン音楽において一種の  
「ノスタルジー」という位置づけ

文化の相対化 ≠ 価値の相対化

・本流／支流という音楽の流れ→有象無象の乱流へ

→私達は巷に溢れる音楽・文化・生活様式を「選択」する権利と義務が与えられる

## 5. 発表に向けて

postmodernismは本当に「It's all right!」（何でもあり）なのでしょうか？modernismの対抗勢力なのでしょうか？今回私達は、音楽という地点から、前回班に引き続き、私達なりにpostmodernismを定義していきたいと思います。” POP” に” Heavy” に。

今はあまり先入観を持たずに、発表までに自分の好きな音楽を聴いていて下さい。一週間後、その音楽の聴き方が少しでも変わっていることを願います。